UDLM

河原町団地（神奈川県川崎市・2021 年 4 月撮影）

4

vol.305

April 30th
2021

個
即
全

p.2　いま振り返る、大谷幸夫の足跡
p.4　河原町団地を歩く
p.6　文京スポーツセンターを歩く
p.7　書評～言葉にむきあう
p.9　研究室の新メンバー紹介！

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE

いま振り返る、大谷幸夫の足跡

都市設計研究室。1964 年の創設当時、初代教授・丹下健三に招聘され助教授に就任した大谷幸夫は、以来 1984 年の退任時まで在籍した。大谷は都市設計研究室としては「今井町歴史的環境保全市街地整備計画」をはじめとする調査研究を、建築設計実務としては京都国際会館や東京大学法学部 4 号館・文学部 3 号館、国立京都国際会館、金沢工業大学大学本館などの建築物の設計などをつとめるかたわら、『空地の思想』などの著作を残し、2013 年に没するまで、精力的な制作活動・執筆活動を展開した。

都市デザイン研究室に研究室名は変われど、脈々と受け継がれていった大谷の DNA。2021 年度最初のマガジンである今月号では、現在のデザ研メンバーが大谷の設計した実作を歩き、著作を自分なりに解釈することを通じて、研究室のルーツを紐解き、都市への向き合い方を改めて問い直す。

はじめに、著作として本人や周囲の述懐が残されているいくつかのエピソードを軸に、大谷の東京大学退官前後までの経歴を年表形式で整理する。
（文中敬称略・出典に関して注のない画像は藤本撮影）

原体験としての戦争

東京・青山で 1924 年に生まれた大谷は、旧制高校時代に肋膜炎を患ったため徴兵を免れており、後年には戦争で命を落とした同年代の若者への思いを繰り返し述べている。

東京大空襲の際には「大通り、とりわけ四つ辻は火の通り道となり危ない」という母の教えにしたがい、赤坂御所に逃れることによって窮地を脱している。

終戦の翌年に大学を卒業した大谷は、焼け野原になった東京においてぽつりぽつりと人々が戻り生活を再建してゆく様子を目のあたりにし、市民ひとりひとりが都市を支えるという思想を獲得した。戦時ならびに戦後すぐの経験は、経済合理性を優先した超高層建築をベースとした再開発への不信感、防災への意識の高さなどのその後の大谷の姿勢に強く反映されているといえよう。

東京大学図書館前広場
戦没者への慰霊の空間としての意味をもつ

麹町計画
水平方向に密集した高密度化への案
「空地の思想」より

師・丹下健三からの独立

戦後すぐ、浅田孝とともに丹下健三のスタッフとして広島市戦災復興計画・旧東京都庁舎といったプロジェクトに携わる。平和記念資料館本館の設立を担った大谷は、「平和のための工場をつくる」という丹下の言葉に刺激を受け、建築を通じた思想・信条の表明を意識するようになる。

1960 年に丹下研から独立。1961 年の「麹町計画」は、丹下の「東京計画」と比べ個・部分から全体を着想したという点でアプローチを異にしている。

1964 年には都市工学科設立当初、丹下から招聘され、新設された都市工学科に着任する。丹下の都市設計講座を手伝う形となった。最終講義で、「自尊心が背広を着て歩いているような」大谷は丹下から講義内容に関するアドバイスを受けず、認識と方法、すなわち都市をいかに認識し、課題を設定し解決へと導く方法論を指導する、という方針を編み出したと述懐している。

1946
◎東京大学第一工学部卒業
◎大学院特別研究生（旧丹下健三研究室）
☆広島市戦災復興計画

1960
◎丹下研から独立

1961
◎設計連合共同設立
▲麹町計画
▲『覚書 Urbanics 試論』

1964
◎東京大学工学部都市工学科助教授
（都市設計論、都市設計演習）

1966
☆国立京都国際会館本館

1967
◎一級建築士事務所大谷研究所立ち上げ

1968
◎東大紛争

1971
◎東京大学教授
☆川崎駅西口地区総合開発計画

凡例
◎所属に関する事柄
▲著作・論考
☆作品・地区計画

参考文献リスト

・大谷幸夫（1961）『都市構成論と建築家の立場』建築
・大谷幸夫（1969）『川崎市河原町高層住宅基本計画について』住宅
・栗田勇 編（1970）『大谷幸夫・大高正人 現代建築家全集 13』三一書房
・大谷幸夫（1972）『個即全』都市住宅
・大谷幸夫（1972）『川崎市河原町高層住宅団地』建築文化
・大谷幸夫（1979）『空地の思想』北斗出版
・大谷幸夫（1984）『大谷幸夫最終講義 都市と建築の文脈を求めて』大谷幸夫先生退官記念会
・大谷幸夫（1986）『大谷幸夫 建築・都市論集』勁草書房
・大谷幸夫（1986）『文京スポーツセンター』新建築
・AZ 環境計画研究所（1992）『SPACE MODULATOR No.80 Architects Mind 1. 大谷幸夫』
・大谷幸夫（2002）『建築の文脈都市の文脈 再論』歴史・文化のまちづくり研究
・大谷幸夫（2006）『都市的なもの へ－大谷幸夫作品集』建築資料研究社
・大谷幸夫＋大谷幸夫研究会（2009）『建築家の原点 大谷幸夫 建築は誰のために』企業組合建築ジャーナル

研究室での 2 つの実践

大谷は都市設計研究室で、町並み保存と翻訳活動に積極的に取り組んだ。

1976 年にトヨタ財団の助成を受け始まった「歴史環境をめぐる研究会」による「保全的刷新」の研究は、研究室にとって博士課程在学中の福川裕一先生にとっても、歴史的町並み調査の原点となった。1977 年からは、渡辺定夫先生、福川先生や大学院生とチームを組み、今井町歴史的環境保全市街地整備計画調査を展開した。

さらに、海外で展開された議論を日本に導入する訳出活動を行っていた。福川裕一・後藤庄吉・濱田文男・平沢薫・八束はじめ・北原理雄の各氏が分担して訳出したケヴィン・リンチ『時間の中の都市』では、時間と場所のイメージこそが環境をデザインするという考え方が示されている。

『時間の中の都市』
時間 - 場所という視座が光る

国立京都国際会館本館
自身を代表する建築として挙げている

反復されるテーマ

大谷の設計においては、反復して表現される 3 つのテーマを見い出せる。

第一に、個が全体を構想するという思想。低層高密住宅を提案した麹町計画では「部分の真実」、すなわち市民一人の生活から都市を描き出すことをテーマとしていた金沢工業大学ではキャンパス全体を規定するマスタープランを作成せず、各時点での造営を積み重ねて全体像を形成するアプローチを採用した。

第二に、自然との応答。自身の代表作と語った国立京都国際会館においては比叡山や宝ヶ池との関係を重視している。埋立地につくられた沖縄コンベンションセンターでは、敷地部に泉水場を設けたほか周囲に水路を引き込んだ。

第三に、戦没者への祈り。沖縄コンベンションセンターは戦禍に遭った沖縄への慰霊が企図されている。また、本郷キャンパスの図書館前広場は、曼荼羅と題され、戦没した先輩と同輩への哀悼の意が込められている。

1973
☆川崎市河原町高層団地
☆松本城周辺整備調査

1974
▲研究室メンバー、ケヴィン・リンチ『時間の中の都市』翻訳

1976
☆「歴史環境をめぐる研究会」発足

1977
☆今井町歴史的環境保全市街地整備計画

1979
▲『空地の思想』

1982
☆旧東京教育大学移転跡地計画
☆長野県松代伝統建造物群保存対策事業

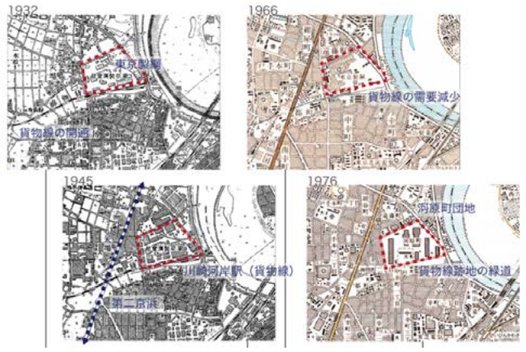
1984
◎東京大学名誉教授

1986
☆文京スポーツセンター

河原町団地を歩く

4月中旬、東京近郊にある2つの大谷の実作を有志で歩く機会を設けた。最初に紹介するのは川崎市営河原町団地。高度経済成長期に設計され、日照の確保のための下層階のズレによってつくりだされる逆Y字型の棟、ならびにその足元に広がるオープンスペースがシンボリックな集合住宅である。デザ研メンバーが事前に作成した資料、ならびに視察の感想を記述し、設計意図と現況との差異を読み解いていく。

周辺の変遷



▲河原町団地周辺地域の変遷（今昔マップよりM2齊藤作成）

現在の河原町団地にあたる敷地およびその周辺地域の履歴を整理する。南武線沿線開通と並行して整備された東京近郊の工業地帯において、高度経済成長期以降、段階的に工場の移転と跡地の複合開発が進展した。

年表

1925　東京製鋼川崎工場の設置（ワイヤーロープ・麻ロープの製造）
1927　南武線登戸～川崎間、貨物線矢向～川崎河岸間開業
　　当時の貨物線は砂利の運搬を担う
1936　第二京浜道路
1941-1945　太平洋戦争
1969　東京製鋼川崎工場が土浦へ移転拡張
1971　河原町団地建設
1972　貨物線廃止　貨物線跡地に「さいわい緑道」
1989　川崎駅西口の明治製菓工場が移転
　　跡地に「かわさきテクノピア」
2000　東芝電機工場が移転　跡地に「ラゾーナ川崎」

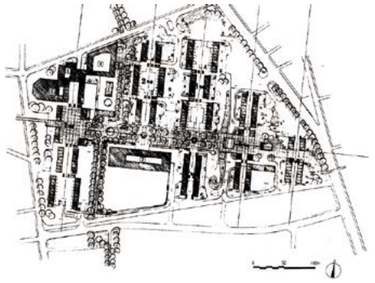
設計の特徴

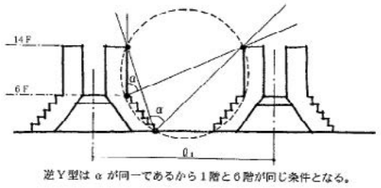
■設計の概要と背景
・工場跡地 13.7ha の再開発事業
・神奈川県、神奈川県住宅供給公社、川崎市、川崎市住宅供給公社の事業
・1960 年代後半に建設、1972 年に入居開始
・高度経済成長による都心部の人口増加・住宅不足
・公害都市川崎市に高密度かつ健康で居住性の高い住宅地を設計すること

■諸元
敷地面積 14ha ｜住戸数 3600 戸｜計画人口 13,000 人｜延床面積 250,000 ㎡｜人口密度 1,120 人 /ha ｜容積率 190%

■設計の特徴
〈団地スケール〉
・十字のグリーンベルトによる団地の組織化
・スーパーブロックによる歩車分離
→①周辺からの団地の孤立化、②団地が周辺へ与える影響作用の問題への対応策として周辺グリーンベルトと連結し緑地空間を共有する
→住宅建設より市街化形成、市街化更新という認識の定着

〈建築スケール（逆Y字型住棟）〉
・公営住宅であるがゆえ居住環境の格差を是正する逆Y字型（南面からの日照と眺望の確保、隣棟間隔を抑えて効率化）
・中間領域「カバードスペース」の内包、住戸の受けた歪みを受け止める余地、私的形式の中に都市的・社会的空間を閉じ込める（cf. 高層建築は密度的に1つの街区に相当する要素を含むはずだがそれらは抑圧される）

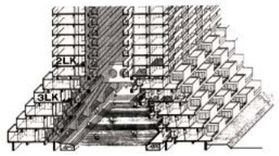

▲団地スケールの平面図「現代日本建築全集 18」（1980）より



▲建築スケールの断面図
「都市的なるものへ―大谷幸夫作品集」（2006）より

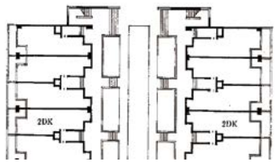
■空間構成

せり出した低層部分と高層部分、それによって内包されたヴォイド



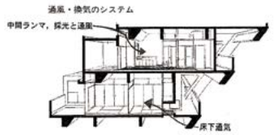
▲「現代日本建築家全集 18」（1980）より

長いアルコーブ＝「露地」によるプライバシーと安全性の確保、余裕のある風景へ



▲「都市住宅 7212」（1972）より

極限の密集住宅において屋根から採光、床下から通風という自由な概念が浮かび上がる

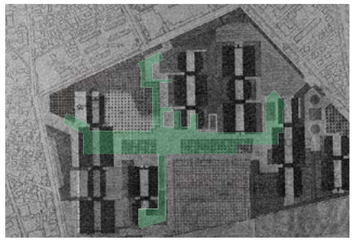


▲「都市的なるものへ」（2006）より

文章：M2 河﨑

歩みを通じて

1973 年の完成から約 50 年が経過した河原町団地。2005 年には児童数の減少に伴い、団地内に設けられていた河原町小学校が閉校するなど、設計当初では想定できなかったような問題も顕在化している。印象に残った河原町団地固有の風景を取り上げつつ、制作当時の空間設計の意図が残されているか、適宜過去の写真との比較を交じえ検証していく。


▲土地利用計画図（緑はグリーンスペース、追記）「建築 vol.109」（1969）より

当初の土地利用計画では、団地内部を組織付ける骨組み、人々にとっての戸外生活のための空間を確保するために、十字形に交差したグリーンスペースの設置が盛り込まれていた。

一方、実際には緑地帯は途切れ、十字型のグリーンスペースは完成されるに至らなかった。実際に散策してみると、植栽より無機質なアスファルトが際立っておりやや殺風景な印象を受ける。

▲4 号棟西街路

▲逆Y字型棟下カバードスペース 「都市的なるものへ 大谷幸夫作品集」（2006）より

▲現在のカバードスペース（撮影：陳）

逆Y型住棟のカバードスペースは体育館に近いセミオープンスペースであり、子どもの遊び場として設計された。この空間の通風換気は安定しており、面積も広いため、災害（特に火災）発生時の避難場所にも使われる。

半屋内広場にはかつてバスケットボールのゴールが設置されていたが、逆Y型内でボールの音が反響してしまうためゴールは撤去されてしまった。現在では落下物多発のため、使用禁止になっている。一方で、散策時にはボール遊びを行う親子の姿も見られた。

住民の保有する自転車は各住戸の前やピロティなど、風雨をしのげる場所に置かれ、屋外の駐輪場はさほど使われていない模様だった。並べられた自転車の奥には年1度逆Y字棟下オープンスペースで開催される夏祭りの神輿が眠っていた。

▲ピロティに置かれた自転車

▲自転車の後ろに眠る神輿（撮影：陳）

▲屋外駐輪場

▲ラゾーナ川崎

1971 年以降川崎駅西口地区市街地再開発計画が進められ、河原町団地から川崎駅に至るまでの商店街の活性化のため、団地内の商業施設は想定居住人口の 3 分の 1 を満たす程度しか配置せず、スーパーは北西端に配置されるのみであった。

実際には、団地内のスーパーは残存しているものの、個人商店は一部がシャッター街と化しており、かわりに医療・福祉系テナントが見受けられる。団地北側に所在する大型スーパーが賑わいを見せているようで、東芝電機工場跡に整備されたラゾーナ川崎は市外の人々をも誘引する巨大ショッピングモールとなっている。　また、多摩川に沿って壁となるような中高層マンションの建設が推し進められ、団地の東側を走る府中街道から多摩川を見通すことが難しくなっている。

文章原案：M2 陳

参加者の感想

There are significant differences between the Red Square in Building No.8 and the one in Building No.4&6. The latter is brighter because of its position in the cluster. And it is available in the prescribed time frame. Surprisingly, the atmosphere of the two squares are quite different because of the sunlight condition and different management requirements. （M2 陳　）

河原町団地散策のみに参加しました。以前から見たいと思っていた逆Y字型の住棟形態により生み出される足元空間は、当日の暑い日差しを遮り、何とも心地の良いセミオープンスペースとなっていました。その一方で、団地内は全体として少し物寂しい雰囲気が漂っており、竣工当時の賑わっていたであろう様子を思い浮かべながら散策していました。（M1 渡邉）

文京スポーツセンターを歩く

河原町団地散策と同日に、デザ研メンバーは本郷キャンパスの近隣に位置する文京スポーツセンターを歩んだ。東京教育大学（現・筑波大学）の移転計画に伴い、周辺の緑地「教育の森公園」と一体となって市民に開放された屋内運動場として、「文京スポーツセンター」が誕生したのは 1984 年。大谷が東京大学を退職した後に設立された実作である。

設計の意図

大谷は、教育の森公園ならびに文京スポーツセンターに関し、災害時の避難に寄与することを前提として設計を行っている。災害発生時、前者は周辺地域の住民を受け入れる避難広場として、後者は被災者を受け入れる収容施設としての役割を果たす。

外観において際立つ尖塔や斜めにカットされたスカイラインといった特徴的なデザインは、自身が火災に遭遇した際に光が反射した塔屋を目印として避難した体験が反映されている。

内部のアリーナやロビーは天空からの光を招き入れる。「災害などの非日常状況のもとで新しい空間を賦与し、それを日常的空間に包摂あるいは合成することで新たな経験をつくりだす」という思想は、今日においても重要視されるべきであろう。

参考：「文京スポーツセンター スカイラインに託したこと」新建築（1986）

歩みを通じて

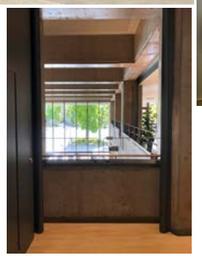
▲外観（北西面）

人々の出入りする南西面はきらびやかであるいっぽうで、搬出口や駐車スペースが存在する北西面は窓が少なく、厳かな印象も。

◀外観（南西面）

▲2 階より天井をのぞむ

大胆に設けられた吹き抜けと光が差し込むさまざまな形の開口部が生み出す光の差し込む空間は、ついお気に入りのアングルを探してしまうような魅力に富んでいる。



▲3 階よりロビー方向をのぞむ

▼3/4F 階段（撮影：上原）　1/2F 階段▼

螺旋を描きつつも、丸みを帯びた踊り場を有する階段。センター内はエレベーターにくわえ、階段が数多く存在するが、とりわけ後者のバリエーションは豊富であり、上昇する喜びをもたらしている。階段の手すりの外側には現在用いられていない階段が残されていた。

参加者の感想

「建築を通して都市を捉える」これは大谷先生が大事にしていた考えだが、一建築から捉えられる都市の大きさはどの程度だろう。災害時にも見えるようにとデザインされた塔の周囲は高い建物が林立し、もはや目立たない。今大谷先生が設計するならどうするだろうと思索する。（M2 岡本）

鋭角を多用しながらも要所要所に曲線が使われ、不思議と尖った印象を受けない。運動施設とは思えないほど細部まで思いが込められた空間には、ほとんどが南向きに取られた開口部から春の柔らかな日光が差し込み壁に反射して、人々を上へと誘い出すように照らし出していたのが印象的であった。（M2 広域研 上原）

書評～言葉にむきあう

大谷は『空地の思想』をはじめ、自作品の解説、都市問題に対する提言、都市工在籍時を述懐する対談などを通じ、数多くの言葉を残している。その示唆に富んだメッセージを受け取り、現在のデザ研メンバーなりに解釈した書評を記載した。

「都市住宅 特集個即全 7212」（1972）より

河原町団地から共有空間を考える M2 河﨑篤史

論評「社会的なものが私的形式に閉じこめられるひずみ」では、現代建築やそこでの空間が巨大化していく一方で、その内部には人々の行動様式は慣習的なものが残っている、すなわち**建築の私的形式の中に都市的・社会的なものが内包されていて、そこに「ずれ」が生じてきている**ということが指摘されている。また論評「空間の所有」では**合理的な空間を追求しながらも「＜共有の体験＞」を両立させていく必要性**について指摘されている。

こうした問題意識から川崎市河原町高層住宅団地における、Y 字型の家（＝私的空間）とその余白に生まれたカバードスペース（＝共有部分）の関係性が設計され、「＜共有の体験＞」を可能にしようとしているという点が 50 年経った現在においても示唆に富んでおり、大変興味深い。

従来の日本の住まい方を振り返ると、「ウチ」の意識が強いと言われる日本であれど、そこには家部分を指す「ウチ」、路地によっていくつかの世帯が結びついたコミュニティ単位としての「ウチ」、またその路地が道によって結びついた町スケールでのコミュニティ単位としての「ウチ」、と家以外の「共有部分」において**入れ子状に生まれていた「ウチの感覚」は大谷先生の言葉を借りれば「＜共有の体験＞」と言えるのではなかろうか。**

高度経済成長期の慢性的な住宅不足解消のために「住宅機能」のみが優先され供給される中で、そうした日本人の根底にある住まい方（＝社会的なもの）に再注目し、それを団地のような巨大建築にて「＜共有の体験＞」として体現しようとしている点について、**モダニズム建築の機能主義的・合理的な考え方と従来の日本のあたたかな住まい方・空間のしつらえの考え方がハイブリッドになった日本流に進化した近代建築**と言えるのではないだろうか。

しかし、一方でスケールの問題において、アナロジーが単純なようにも感じる。**「＜共有の体験＞」を可能にする適切なスケールがあるのではないだろうか。**すなわち河原町高層住宅団地にて設計された「＜共有の体験＞」を生むカバードスペースは確かに世帯数とその空間の大きさの「比率」は日本の住まい方に近いかもしれないが、それがただ「比率」の問題として単純に倍々にしていくだけでは、従来の路地で生まれていたような共有感覚は芽生えず、むしろ「誰にも体験されない」空間になっているのではないかということだ。

京都のような町家が並ぶ町並みでは自分の家の軒先に加えて、隣家の軒先の一部もはみ出して掃き掃除をするそうだ。その「はみ出した掃除」こそが共有感覚であり、それはやはり**適切なコミュニティのスケール・顔が見える関係のスケールにあってこそではないだろうか。**このカバードスペースもある一定のコミュニティ単位によって分節されていくようなことを考えてみたい。それは現代においても乱立する高層マンションを考えていくときのヒントになるはずだ。

「空地の思想」（1979）より

過去から現在を見て、現在から未来を考える M2 松坂大和

「現代が価値あることと意識されたことのみを追求し、その目的を果たすことだけが念頭にあって、その他のことには気が繋がったり評価しない、といった現代の思考」が、「歴史的な街並みが破壊・消滅していること」や「都市の環境が悪化していること」の原因であると指摘されている。それに対して行われる街並み保存や文化的景観の指定は、歴史的遺構の凍結的保存ではなく、積み重ねられてきた「古いものに**その時代の要請に応じた新しい要素を付け加えていく作法とか手法**を見出していくもの」であると述べられている。私の研究対象である寺社における開発においても同様の経緯を経て、「作法」や「手法」を見出しそうとしている。

私はそれを歴史や伝統を継承するための手段と捉えていたが、未来の視点から現在を見て「古いものに新しい要素を付け加えていく」ことを考えると、現在付け加えられている要素が、**時間の流れの中で連続したものとして捉えられているかどうか**が重要であり、そのような視点で研究対象を見ていきたいと感じた。

「SPACE MODULATOR No.80」（1992）より

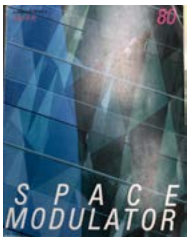
子どもの空間をいかに設えるか M2 鈴木直輝

東京都児童会館について触れた一節に目が留まりました。「**部分から全体へ、確からしい部分を集合させながら総体をつくっていく**ということです。・・・児童会館の場合は、自然科学の分野とか音楽や工作といた児童に関わるいろんな活動の集合だから、それがそのまま表現されました。」

私の都市デザインの視点の一つに「子どもの空間」があります。これまでも手賀沼 PJ や萬松園再生 PJ、小布施 PJ などのプロジェクトで子どもとのワークショップを企画・運営したり、設計演習課題でも子どもの居場所・空間づくりをテーマにしてきたりと、子どもと都市デザインには関心を寄せています。

大谷先生は、東京都児童会館の設計手法を「積み木型積層構造」と呼んでいます。**それぞれの活動の固有性を保証する各階の配置と同時に、各階のそれぞれ固有の活動空間を分断するのではなく、あたかも積み木遊びのように多様な子どもや要素が積み重ね、相互を結びつける**としています。上下階の交差部分を吹き抜けとし、そこにオープンな階段を架け渡すことで、視覚的にも動線としても上下階の連結・連携が視覚の異動を伴いながらごく自然に誘発されることを期待したとあります。

子どもは元来、とても自由であると考えています。一人になったり、群れたり。走り回ったり、止まったり。何かに夢中になったと思ったら、次には興味を持っていなかったり。子どもたちの自由な遊びや学び、そうした多様な活動を受け止める空間はとても不確かなものです。**不確かなものを木の柱や煉瓦の壁など私たちが直接手にすることのできる確かなものを積み重ねて作るという考え方や、相互の階が垣間見え、流動的な子どもの動きを促進するというデザイン**は、今にもつながる子どもの空間の設えだと思いました。



東京都児童会館跡地は東京都・渋谷区の都市再生ステップアップ・プロジェクトの事業計画地に含まれており、児童会館の歴史を踏まえた育成機能の導入が事業目的の一部として書かれています。どのような子どものための空間が設られるのか、注目してみていきたいと思います。

「八月の空に寄せて」（1995）燎 26 号所収より

蒼天をみつめて M2 藤本一輝

戦後 50 年を迎えた 1995 年に執筆された文章であり、後年の『建築家の原点』にも所収される。「八月に入ると東京にも空が戻ってくる。喧騒と過密の町に慌ただしく時を過し…それはまぎれもなく 50 年前の 8 月 15 日、私がみた空なのだ。」21 歳の大谷先生は、勤労動員で向かっていた八ヶ岳で終戦を迎えた。**大谷先生の作品と戦時および戦争直後の体験は切っても切り離せない**。日本の固有性を表現した上で諸外国への戦争責任への贖罪を落とし込んだ京都国際会館、東京大空襲の避難体験から災害発生時を考慮しシンボル性を注ぎ込んだ文京スポーツセンターなど、戦争･戦災に対する答えを突きつけた作品は枚挙にいとまがない。また、終戦後ポツポツと東京に人が戻る様子は個の生活を重視する姿勢に現れた。灰燼に帰した東京の空は、どれほど広かったのだろうか。

後年東京都庁舎をはじめ超高層を志向した師・丹下建三に対し、大谷先生は超高層に反対する姿勢を貫き続けた。「都市の空が侵食され消えてゆくことは、海や山や原野が遠ざかり消えてゆくことと合せて、私達の生存する空間から自然や宇宙の体系が消えてゆくことを意味している。」自分自身、設計課題やコンペなどにおいて「地」を考えたことはあるものの、「天」に対して思いを馳せたことはほぼない。生まれ育った関東平野の真ん中の街で迎えたタワマンの建設ラッシュに際し徐々に空が狭まることに、どこまでも続く地域の発展の道程を見出し一種の快感を抱いていたふしもある。どちらかといえば、いまでも高層ビルの乱立にも理解を示せなくもない。

しかし、天があり地があり、そのあいだにひとりひとりが存在する。大谷先生の言葉で思い出した事実。昨今、スマートフォンに普及に伴い人々の視線は常に下に向けられている。歩行中に空を見つめる機会など格段に減ってしまったのではないだろうか。

西新宿、行き交う人々に歯向かうように窮屈な空仰ぎ見る。蒼天。その茫漠さに押し潰されるのではないかという不安がわずかながら去来するいっぽう、日光から受け取る慈愛はどこまでもまっすぐで、ほっとする。バベルの塔が崩れる瞬間は、生きているあいだには訪れそうにない。

振り返り

大谷先生の著作を読みながら、人々の生活から着想を得、個が全体を構成するという思想を貫き、大学教授という立場から建設と執筆を並行して進めたその偉大さにただただ圧倒されていた。

本企画において紹介することができた大谷先生の仕事はほんの一部に過ぎない。時勢柄、東京近郊の実作を見学するにとどまったが、金沢工業大学や京都国際会館といった主要な作品は東京圏の外にも立地している。また、新奇な概念を提示しつつ緻密な論理によって構成されている 1960 年代前半の著作や、都市設計研究室内で展開していた町並み保全の実践、および講義の内容といった事項は紙幅の都合上、記述することができなかった。今後のマガジンにおいて改めて取り上げられることを期待したい。

大谷先生の土地の履歴を重視し、人々の営みに目を向ける姿勢は、現在のデザ研にも引き継がれているだろう。いっぽうで、研究室としての「設計色」は徐々に薄まりつつある。変わりゆくものがあり、変わらないものもある。我々はどのような歴史を紡げるか。

資料を提供してくださった中島直人先生、企画に参加いただいた皆様、ありがとうございます！

研究室の新メンバー紹介！

修士１年 >>> p.9 ／ 修士２年 >>> p.10

今年度は新しく修士１年のメンバーが６名、修士２年のメンバーが地域デザイン研究室より３名加わりました。顔合わせやオンライン懇親会を通じて早速打ち解けあっている様子です。新メンバーをあらゆる角度から解き明かすため、７つの質問をぶつけてみました。

1. 出身地　2. 出身大学　3. これまでの研究
4. 研究室の決め手　5. 好きなまち　6. 座右の銘
7. アピールポイント　右上：意気込み

自分の考えを他人に明快に伝える力をつける！

Naho Kamiya
神谷南帆

1 岐阜県多治見市
日本一の暑さを競う町で夏になるとニュースに多々登場します

2 横浜国立大学 建築学科

3 谷中の地域資源である歴史的な建物の「活用」を通した地域との関わりの実態について

4 地域に入り込み、住民の方と共に町の将来像を描くことのできる機会が豊富な PJ に魅力を感じた

5 ホイアン（ベトナム）
小さな路地、ぎゅっと詰まって出店が並ぶ市場、そこへ溢れ出る人間の活動が印象的

6 無欲は怠惰の基

7 底なしの胃袋、いつでもどこでもなにか食べています

コンタクトつけられるようになる

Tomoki Goda
合田智揮

1 群馬県高崎市
生まれ育ったまちのスケール感は何をとっても最高です

2 東京大学工学部 都市工学科

3 卒業制作では地元高崎市で古墳横の社宅を地域の庭として開放する提案を行いました

4 メンバーの人柄に惹かれたから

5 新宿御苑
晴れの日も雨の日も天気を反映したように包み込まれる感じが好きです

6 先手必勝 予定調和

7 全てがガバガバなのになんとか生きているところ

一緒に仕事したいと思われる人になりたい

Rina Sugimoto
杉本莉菜

1 静岡県静岡市
快適・ちょうどいい（気候・利便性・人柄・地形）

2 奈良女子大学生活環境学部住環境学科

3 長期的な時間軸に着目した人と自然の接点を創出するランドスケープデザイン

4 ランドスケープの魅力を教えてくれた恩師の恩師・宮城俊作先生のもとで学びたいと思ったから

5 近江八幡
自然と歴史的資源による美しい風景を守り継承するまち

6 秘すれば花

7 元気あります！

締め切りギリギリにやらないこと

Karin Ryu
劉嘉林

1 中国吉林省
冬は氷点下 30 度にもなる寒いところですが、氷灯が有名なところです

2 東京大学文学部 人文学科

3 東アジア諸国の海外神社について、建築時の記録と現在の保存状況の調査をしました

4 プロジェクトで実際に街と関わることができることで、研究と実践を繋げられることを楽しみにしております

5 東京
特に渋谷の雑多なものが混ざった空間が好きです。いろんな人を受け入れる雰囲気がいいと思っています

6 物以稀為貴

7 ソニー損保ありがとうモルカー CM、ナレーションを担当しました。

まずは urban design の全貌を掴みたいです

Nanato Wakamatsu
若松凪人

1 ロスアンゼルス
気候も人も良い場所です

2 東京大学工学部 建築学科

3 東京山の手を対象に地形と空間構造の関係をマッピングによって調査しました

4 New type of urban designer になるべく、都市デザイン研究室を志望しました

5 東京
地形も歴史も都市構造も興味深い変化に富んでいるからです

6 入力不力

7 いいお尻だと言われたことはあります

より都市空間への愛と理解を深めるぞ！

Daisuke Watanabe
渡邉大祐

1 福島県福島市
盆地。夏は暑く冬は寒い。水や果物が旨い地方都市です

2 千葉大学工学部 総合工学科

3 都市防災・復興関連を中心に研究しました。修士でもそこは引き継ぎつつ専門分野を広げたいです

4 プロジェクトに魅せられて。実際の都市と関わりを持ちつつ、研究や設計に取り組みたかったから

5 喜多方
商家・蔵の街並み。周囲には山々が見え、心地よいです。あと日本酒が旨い

6 眼を養い 手を練れ

7 社畜適性と行動力

4 月 12 日入学式にて

右目まわりの神経を強くする！

Keita Ueda
植田啓太

1 三重県桑名市
港・城・宿場と色々な履歴が重なる街です

2 東京大学工学部都市工学科

3 原発被災市街地における空地の活用と管理、緑化。土地性と人間活動の関係性が関心の根幹です

4 選んだというより自然と合流した形ですが、地域デザイン研究室と方向性が似ていたため

5 アムステルダム
歴史の重層性の上に、新しい文化の萌芽を感じる街なので

6 格物究理

7 真面目そうと言われますが、それほどでもありません

PJを通して、地域に向き合い続けたい

Ryota Okamoto
岡本亮太

1 愛知県知立市
トヨタを頂点とする企業城下町。朝は豊田方面にトヨタ車の渋滞

2 豊橋技術科学大学

3 ルワンダ・キガリの未計画居住地における居住環境改善の仕組みを、資金の流れから明らかにした

4 プロジェクトに代表されるように地域に寄り添い、向き合い続ける姿勢を持っているから

5 タリン
道路空間が人に開放されている点と30分車を走らせると森というサイズ感

6 大切な人を大切に

7 筋肉。院試時に自分が一番マッチョだと確信しました

Hit the gym and sweat it out

Shualing Cui
崔帥玲

1 鄭州市登封
A city with world heritage "The Centre of Heaven and Earth". Famous for Shaolin Temple and kung-fu

2 四川大学

3 Research on the Sustainable Tourism Development Evaluation System in Suburban Heritage Towns

4 Urban Planning

5 Hometown 登封
I grew up here, accept basic education here and go to world around from here

6 Follow your heart

7 high tolerance of alcohol, never drunk

ごあいさつ

第十七代編集長に任命いただきこのごあいさつを執筆するにあたり、歴代の編集長は何を思い編集長に就かれたのか、前山さん・應武さんの書かれた挨拶を今一度読み返しました。

そこでは「身勝手さ」「自主性」といった言葉が出てきていて、この都市デザイン研究室マガジンというのは、都市工学科や都市デザイン研究室に脈々と引き継がれてきているそうした自主的な精神・風土を外部に向けて発信する媒体であるということを再認識しているところです。

一方で私が昨年度の活動を通じて感じていることは、確かに「自主性」はあるけれども、「自身の主張・思想の発信」という点で慎重になり過ぎているのではないかということです。このコロナ禍の状況の中で、物理的にも精神的にも内への志向が高まっており、実際に昨年度の記事ではレビュー的な企画が多かったように思います。

もちろん社会的制約も大きく、そうした内容も重要ではあります。しかし、こうした状況だからこそ、自己の思想を外へ積極的に発信し問いかけ、マガジンが発行された後にまたそれをベースに議論が巻き起こるような、そんな外へと開いていくような「着火剤」にマガジンがなりうる可能性を秘めているのではないかと感じています。（燃えすぎて「炎上」してはいけません。）

と、ここまで偉そうなことを言っていますが、私自身、演習や設計の提案を通じて「真面目だねえ」「堅実だねえ」と言われることが多く、わずかに残された残り一年で、学生ならではの自由な発想・発信ができるようになりたいという気持ちもあり、自戒の念を多分に込めてここに記します。

今年度の編集部は新たに修士一年の神谷、合田、杉本、若松、渡邉の五名を加えた計十名で活動し、それぞれの目を通して「都市デザイン研究室」を発信していきます。どうか暖かく見守っていただけますと幸いです。

第十七代編集長　河﨑篤史

COLUMN

BOOK OF THE MONTH

都市の＜隙間＞から まちをつくろう
大谷悠
学芸出版社
2020 年

推薦者
M2 植田

空き家・空き地が大量に発生したドイツ・ライプツィヒ。著者が主体的に関わりながらまとめた、空きスペースにおける住民主体の実践の記録から、衰退した都市の中で、制御できない「隙間」を使うからこそ可能になるまちづくりのあり方が論じられている。

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！
https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

プロジェクト報告会 2021

プロジェクト報告会 2021 をオンラインにて開催しました。COVID-19 に翻弄され、地域との関わり方を模索し続けた 1 年間。その中で各 PJ に創意工夫がみられました。ぜひご覧ください。（M2 岡本）

富士吉田 PJ 下吉田地区調査

生憎の曇天でしたが、現地を歩き回ったり、市役所や定住移住促進センター、飲み屋街の方などから話を聞いて、今年度から新たに対象地となる下吉田地区についての理解を深めました。（M2 松坂）

LOOKING BACK AT APRIL

5th	上野 PJ 守谷市視察
13th	新メンバー歓迎会
14th	PJ 報告会 2021
16-17th	富士吉田 PJ 調査
17th	宇治 PJ イベント
研究室会議	13th,21st,27th

POSTSCRIPT

徴兵の対象となった世代にとって、戦地に赴くかを決めたのは生年や健康状態の僅かな差。若くして亡くなった建築専攻者は少なくないはず。彼らが存命なら都市の姿はどう変わっていたのか……if を想像してしまう。（M2 藤本）

発行：東京大学都市デザイン研究室マガジン編集部
河﨑篤史・鈴木直輝・藤本一輝・松坂大和・CHEN Jinyu・神谷南帆・合田智揮・杉本莉菜・若松凪人・渡邉大祐
発行日：2021 年 4 月 30 日